

第21回 国土とは…

IT生

映画「人生フルーツ」は、津端修一、英子夫妻の生活をドキュメンタリーとして記録したものである。ふたり合わせて、177歳となる老夫婦の田舎暮らしを描写するという体裁だが、投げかけるテーマは重く、深い。

人生 フルーツ

Life is Fruity



ふたりの自然な表情が生活ぶりを表している

夫妻は、愛知県春日井市の高蔵寺ニュータウンの一軒家にすむ。建築家である夫の修一が、ニュータウンのグランドデザインを手掛けたことが、そこにすむ理由となっている。修一はその理由を、「造成で里山を失った土地の再生に責任をもちたい」という。自ら、自宅の敷

地に雑木林と畑をつくるのみならず、はげ山の再生をもよびかけた。そんな生活（運動）を半世紀続けている。

もともと、修一は東京育ちで、戦前の東大第一工学部を卒業後、海軍の技術士官をへて、戦後は焼け跡の再生に尽力したいと、建築家に転身、住宅公団でニュータウンの計画を主導する。しかし、高蔵寺ニュータウンがそうであったように、高度成長期の日本では、住宅造成のために地形をも変えてしまう。

修一は、高蔵寺ニュータウンのデザインで、尾根を生かし、雑木林を残し、風の道をつくるという選択をするのだが、ふたをあけると、尾根は削られ、谷は埋められた。こうした土地の造成は、阪神大震災、東日本大震災でもそうであったように、のちの災害で、地滑りを起こす要因となった。そもそも、ニュータウンは伊勢湾台風の被災地の高台移転のはずだったが、自然の地形を無視したために、次の災害を生み出す土壌となってしまった。

そのことを修一は「東京の視点でしか開発をしないツケ」と断じ、そのことに責任をとるために、高蔵寺ニュータウンにすみつく決心をする。クビになった復興大臣の発言もまさにこれである。

「人生フルーツ」の製作中に、修一は人生の幕を閉じる。いつものように畑仕事をし、「ちよっと疲れた」といって、横になったまま帰らぬ人となった。

死に顔も作品中にでるのだが、その姿は、枯れ木のように朽ち果てたという表現があてはまるほど、あまりにも自然であった。

「土」「生活」「命」が「国土」を形成しているのだと実感した瞬間だった。

（平成 29 年 4 月）